

『若草物語』の研究

— 四人姉妹の結婚観に触れて —

森 山 千 晶

目 次

はじめに

第一章 作者の生涯と文業

第二章 『若草物語』について

第一節 四人姉妹の少女時代

第二節 メグの結婚

第三章 『続若草物語』について

第一節 メグの結婚生活

第二節 エイミーの結婚

第三節 ジョーの結婚

第四章 三人姉妹の結婚観と作品の評価

第一節 作品に現われた姉妹たちの結婚観をめぐって

第二節 オールコットのアメリカ文学に占める位置

はじめに

私が『若草物語』(Little Women, 1868—9)と初めて出会ったのは、小学生の時であった。その時に読んだ主人公ジョーの強烈な印

象を、忘れることができなかった。私はジョーが大好きになった。ジョーの自由奔放な振るまいに、わくわくしていたことを憶えている。

『若草物語』が、ルイザ・メイ・オールコット女史(Louisa May Alcott (1832—88))という素晴らしい人物によって記された英米文学であることが知ったのは、それから何年か後のことであった。大学生になって『若草物語』をもう一度読んでみた時、それは私に新しい印象を与えてくれた。子供の頃は、四人姉妹の登場する楽しいお話だと思っていたそれは、今では、ほのぼのとした一家を通して、私たちに多くの教訓を教えてくれる書であると感じた。そして、『続若草物語』では、少女であった四人姉妹が成長して、女性としての考え方、生き方を語っている。それを読んだ時、私自身も、同年代の女性として、時代は異なっても、彼女たちの生き方に深い感銘を感じずにはいられなかった。

そこで、この卒業論文で『若草物語』をとりあげて、彼女たちの結婚観、彼女たちにとって女性として幸福な生き方というものについて、同じ女性として研究していきたいと思う。そしてこの研究を通して、自分自身のこれからの生き方に、何か得ることができればと思う。

第一章 作者の生涯と文業

ルイザ・メイ・オールcott (Loisa May Alcott) は、一八三二年十一月二十九日、米國フィラデルフィア郊外のジャマントウンで生まれた。哲学者であり、教育者である父エイモス・ブロンソン・オールcott (Amos Bronson Alcott (1799—1888)) は、非常な理想家で、四海同胞主義を実践的に行い、豊かでもないのに困窮している人々を見れば、だれ彼の差別もなく、家に引き取って世話をしたので、オールcott家の家は無料宿泊所と化し、親子水入らずで暮らすなどということは、ほとんどなかった。従って母アビゲイル (Abigail May Alcott) は、貧しい家計の切り盛りで苦しむし、四人の娘たちも幼少のころから物質的に苦勞が多かった。しかし、たとえ物質的に貧しくとも、精神の豊かさを尊んだ両親の生き方はオールcottの誇りであった。ボストンを経てマサチューセツ州のコンコード (Concord) に移ったのが一八四〇年の春であった。これまでに二十回以上の引越をしている。オールcottは第二女で、十五歳の時には、父の指導の下に独習した学問を基に、一ツ年上の姉のアンナ (Anna Bronson) と二人で納屋を借りて学校を開き、十七歳の時には、ボストン市の学校で教えるかたわら脚本を書いた。教育を父から受け、R・W・エマソン、H・D・ソロー、T・パークーから学んだことは多い。十九歳の時には他家に奉公し、あらゆる屈辱と苦勞を忍んで得た給料の全部を手もと不如意な母に贈った。二十三歳の時に初めて『花物語』(Flower Fables) が出版され三十二ドルを得て、文筆によって家計をたすけてゆくという少女時代からの夢が実現されたのである。二十六歳の日記には、

「教えたり書いたり、縫物をしたり大忙がし。講演を聞き、書物や人々から知識を吸いとる。人生は私の大学、立派に卒業して賞を得たい。」

と記している。一八五八年に最後の妹ベス (Elizabeth Sewall) が亡くなる。二十八歳の頃からアトランティック・マンズリーに短編や詩を発表し始めたが、文才が広く認められたのは『病院のスケッチ』(Hospital Sketches) である。三十歳の時南北戦争の従軍看護婦を志願して献身的に働き、過勞のために腸チフスとなり、一時は熱のため死を覚悟するほどの大病であった。このため生涯健康がすぐれなかった。一八六五年一月から翌年の七月まで渡欧。ここで、尊敬するチャールズ・ディケンズに会い、『若草物語』のローリー (Laurie) のモデルとなったポーランドの少年との交友があった。帰国後、ロバーツ・ブラザーズ出版社の支配人トマス・ネイルズから少女小説の執筆を再三依頼され、自分の家族を素材に書き上げたのが『若草物語』(Little Women) の第一部である。大好評のために第二部も翌一八六九年に出版され、オールcottは一躍有名になった。三十五歳の時である。この書が出版されるや、全米国の少女たちは、熱狂してこれを観迎した。オールcottは俄然裕福な身の上となり、父の負債を返済し、母を安楽にさせ、自分も友人とともに欧州を漫遊し、妹のメイを絵画の修業にイタリアへ留学させた。『昔気質の少女』(An Old Fashioned Girl) の出版後、再び渡欧したオールcottは、一八七一年一月、義兄ジョン・ブラットの急逝をローマで知り、ここに生まれたのが『少年たち』(Little Men) である。五万部を売りつくしたという。一八七三年に小説『仕事』(Work)、翌年に『八人のいとこ』(Eight Cousins)、一

八七六年に『花ざかりのローズ』(Rose is Bloom)、小説『現代のメフィストフェレス』(A Modern Mephistopheles)を一八七七年に、ジョーのプラムフィールドで生活した少年少女の成人した姿を描いた『ジョーの子供たち』(Jo's Boys and How They Turned Out)を一八八六年にと続々と発表した。『ライラックの花の下』(Under the Lilacs)は、一八七七年十一月二十五日に亡くなった母を看病しながら書きあげた作品である。これに、『ジャックとジル』(Jack and Jill, A Village Story)を加えて以上が『若草物語』シリーズといわれる八冊の物語である。姉の仕送りで絵の勉強に再度渡欧した妹のメイは、一八七八年三月にロンドンで結婚し、翌年の暮に誕生したばかりのルイザ・メイ・ニイリカーを姉に託して亡くなる。一八八二年の秋に父ブロンソンが脳溢血の発作で倒れ、彼女も病気がちで、保養のためにロックスベリーにある友人の医者之家に身を寄せた。一八八八年三月、姉の家で病床にある父を見舞つてのち、三月六日に二日前の父の死も知らず亡くなった。十五歳であった。

第二章 『若草物語』について

第一節 四人姉妹の少女時代

物語はアメリカの中流家庭であるマーチ家を舞台に始まる。マーチ家は、メック Meg (Margaret)、ジョー Jo (Josephine)、ベス Beth (Elizabeth)、エイミー Amy の四人姉妹、両親、女中のハンナとで構成されている。父のマーチ氏が不幸な友人を助けようとして財産を失ったとき、メグとジョーは家庭を助けるために働くことを希望する。

メグは幼い子供たちを相手に家庭教師をし、わずかばかりの給料をえて豊かな気持ちになり、満足していた。彼女は自分でも「ぜいたくが好き」だと告白しているぐらいであるから、貧しいということが一番の悩みであった。

ジョーは好都合にも、活発なお相手が必要とする足の不自由なマーチ伯母にとって、適任者として認められていた。ジョーの野望は何かすばらしい偉業をなすことであつた。それがなんであるか別に考えはなかつたが、時がそれを自分に教えてくれるときめていた。ジョーは大変に本が好きで、自分でも小説を書いたりしていた。ジョーは持ち前の短気と激しいことばづかいと落ちつきのない性格が災いして、しばしば失策をくり返すので、彼女の生活はまことに浮き沈みの多いものであつた。

ベスは学校へゆくにはあまりにはにかみやであつたので、家庭にあつて父に勉強を見てもらつていた。父が慰問使として戦地に行つてからは、彼女は自力でできるだけの勉強を続けていた。彼女は世話女房型の温順な少女で、働きにでている人々を間接にたすける気持ちで、ハンナとともに家庭を整理し住み心地をよくしていた。それに対して、彼女はみんなに愛してもらふ以外は、なんの報酬も得ようとは考えなかつた。ひとりぼっちで長い一日を過ごしながらも、決して寂しさをかこつけたり、怠けたりしなかつた。彼女は生まれつき働きざちだし、それに小さな世界は友だちでにぎわされていた。彼女の悩みは、好きな音楽を勉強できないのと、よいピアノを持つていないということであつた。ベスは小さなひばりのようにうたいながら働き、母や姉たちのために喜んでピアノをひいた。そして毎日、「もしわたしが良い子だったら、いつかは好きな音楽を

やれるようになるんだわ」と希望をもって自分にいきかせていた。しかしベスはショウウ熱にかかったのが原因で、病弱な体になり、三年後に若くして亡くなってしまふのである。

エイミーは姉たちから「小さなラファエル」といわれているだけに、絵画の才は多分に持っていた。花を写生したり、妖精の図案等を作ったり、妙な絵で童話のさし絵を描いたりしている時ほどエイミーにとって幸福なことはなかった。エイミーはつとめなくとも他人を喜ばすという都合のよい術を身につけている上に、氣立てがよいので友だちの間の人氣的となっていた。その氣取ったしとやかなようすは優れた才芸とともに仲間のあこがれのまとなっていた。エイミーはいい意味の甘えっ子であった。みんなに可愛がられて、小さな虚栄心とわがままがほどよく育てられていた。

このような四人姉妹の住むマーチ家の隣家が、ローレンス家である。ローレンス家には、ローリーと呼ばれる、セオドル・ローレンスという十六歳の少年と彼の祖父であるジェームス・ローレンスという老人の二人暮らしで、大へんな金持ちである。やがてローリーは、ある舞踏会を通じて、メグ、ジョーと知りあい、他の妹たちとも仲よくなつていく。ローリーは明るく快活で、行儀のよい少年であった。かしく、スポーツも堪能で、姉妹たちの中ではジョーと特に仲よしになった。新しい友情は春の若草のように繁茂していつて、さまざまな楽しい事件が続々と起こった。だれもかもが、ローリーを好きになった。ローリーもまた彼の家庭教師に、「マーチ家の人たちは実際すべきな連中ですよ。」と語ったほどである。

ローリーの家庭教師は、ジョン・ブルックという青年である。彼

は大へん慈悲深い忍耐強い青年で、マーチ家の人々にも大へん親切であった。

この時の四人姉妹の年令は、メグ十六歳、ジョー十五歳、ベス十三歳、エイミー十二歳である。

こうした人々を中心として物語は展開していくのである。そして「空中樓閣」(Castle in the Air)の章で、四人姉妹とローリーの将来の夢についての希望が描かれている。五人はそれぞれ次のように語っている。

メグは、

「わたしは、ぜいたくなものたくさんある美しいやかたがほしいと思います。おいしい食べ物、いい着物、立派な家具、感じのいい人たち、それにお金がある家なんです。そしてわたしはその家の主婦で、自分の好きなようにし、女中が幾人もいて自分では何一つ働かなくていいんです。もしそうだったらわたしどんなに楽しいでしょう。わたし決して怠けてなんかないのです。いろいろとよいことをして、だれからも愛されるようになりますから。」

ジョーは、

「アラビア馬の一杯はいつた馬小屋、本を積み上げたへやと、魔法のインキがあつて、そのインキで書いた作品はローリーの音楽と同じにどれもこれも有名になるのよ。でもわたし自分のお城へはいる前に何かすばらしいことをやりたいわ。死んで後までも、世の人々から忘れられないような、英雄的で、驚嘆すべきことをやりたいわ。それがなんであるか、まだわからないけれども、わたしは油断なく待ち構えているんだから、今にあなた方を、あつといわしてあげるわよ。わたしは本を著わし、有名になって、お金持ちになりた

いなアノそれが一番わたしに適している一番好きな夢よ。」

ベスは、

「わたしは、無事に家について、おとうさまやおかあさまのおそばで暮らし、みんなのお世話をいろいろとしてあげることですわ。わたしねえ、ピアノをい^{注(1)}ただいてから、もうすっかり満足してしまつたの。わたしはみんなが丈夫でいつまでもいっしょにいられば、そのほかに何も望みはありませんわ。」

注(1) ローレンス氏が、音楽好きのベスの為に贈つた素晴らしいピアノのことである。

エイミーは、

「わたしはたくさん望みがございますけれど、一番は画家になることです。そしてローマへ行って立派な絵を描いて、世界一の有名な画家になりたいんですの」

ローリーは、家出をして自分の好きな道を進みたいと語るがメグにたしなめられ、自分のばかな夢を断念して、

「おじいさまが望まれるだけいつでもそばにいてあげよう。僕はおじいさまのたった一人の孫なんだから。」

と喜んで祖父のために犠牲を払う決心をするのであった。

第二節 メグの結婚

メグは、ある日、金持ちの友人アンニー・マフォットの家にて二週間招待される。彼女はそこでぜいたくな暮らしを送り、友人をうらやましく思い、自分の家のことを思うとわびしく思つたりした。しかし、メグは夜会の日に、マフォット家の人々がマーチ夫人が名利を追つて娘たちの誰かを、ローレンス家にとつがせようともくろん

でいるというゴシップを話しているのを聞き、自尊心を傷つけられ、マフォット家の人々に対して不信の念を抱くのであった。結局メグは、ぜいたくな生活は自分にあつていないと悟り、帰宅するのであった。帰宅後この事件を聞いたマーチ夫人は、

「わたしは娘たちが美しく、多芸で善良な婦人となるようにねがつています。そして人々から賞賛され、愛され、尊敬され、幸福な青年に会い、正しく聡明な結婚をして、神さまが適宜にお与えになる苦勞や悲哀をできるだけすくなくして、有為な一生を送るように念じています。善良な男性に愛され、妻として選ばれることは女性にとって一番美しく、一番よいことです。(中略)わたしは娘たちの将来に対して大きな野心を抱いています。けれどもそれは決してあなた方をはなばなく社交界に送り出させようというのではありません。単にお金持だというだけの理由で金持と結婚させようとか、愛のかけた外見ばかり立派な家で、家庭とはよべぬような家に住ませようとは思いません。お金は必要なもので大切なもので、よく使えば貴いものです。けれどもあなた方はお金を第一のものと思ひ、一生けんめいに努力して獲得する唯一の報酬などと考へないようにしてください。もしあなた方が愛され、満足し、幸福でありさえすれば、自尊心と平和を持たない女王さまの位につくよりも、むしろ貧しい人の妻となつてくれたほうが望ましいと思ひます。」

メグはその言葉に納得はしながらも、貧乏人には、そんな結婚の機会はずかめないと嘆く。それに対してジョーは、それならば老嬢で終わるべきだと言う。マーチ夫人も、

「ジョーのいう通りです。不幸な人妻、あるいは夫を捜し騒ぐ乙女らしくない女性であるよりも、むしろ幸福な老嬢で果てたほうが

まします。(以下略)」

と言っている。私はこの会話に、マーチ夫人の結婚観が見事に収約されていると思う。また、ぜいたくやお金を得ることが大事だと感ずるメグに対する厳しい指導にもとれる。そして、マーチ夫人は娘たちに、現在はまだこの家庭を幸福にして暮らし、やがて結婚の申し込みを受けた場合に自分の家庭を幸福にする下げいこをするように教える。

このように、マーチ夫人は娘たちに、結婚の最も大切な条件として、愛され、家庭が幸福であることを常に説いている。

例えば「経験」(Experiences)の章では、四人姉妹が、休暇の間ずっと、家庭での自分の仕事を休んで何もせず暮らしたらどんなに楽しいであろうかと休養して歓楽を尽くすことにする。しかし実際は、皆が仕事をしないため、家庭という機械を円滑に回転させることができず、実に奇妙な不快な情勢を引き起こした。そして娘たちがそれに気付いた時、マーチ夫人は次のように語るのである。

「家族の楽しさは、各自が自分の役目を忠実に果たして初めて味わえるものだというのを、あなた方に悟らせてあげたかったです。(中略)あなた方は互いに助け合い、毎日の務めを持つているほうが、休息の時がきたときに、一層楽しく感じ、互いに辛いことを忍びあえば、家庭がどんなに快い楽しいものになるかがわかっています。」

この例をとってみてもわかるように、マーチ夫人は、家庭の中で働くことは、退屈や不善をせず肉体的にも精神的にもためになり、お金や流行の知識などよりもはるかに尊いものであることを教えてくれている。

そのうちにメグを愛する人が現われる。それは、ジョン・ブルークであった。彼はメグのことについてまことに卒直で公明正大であったが、ジョーは、姉をとられるくやしさと、ジョンが貧乏なのを理由に、ジョンとメグの結婚について反対する。ジョンはまだ結婚というものを理解していなかった。彼女は、それによって姉妹がばらばらになり、自分以外の他人に愛情をそそぎ、独立していくことを大へん恐ろしく思っていた。しかしこれに対してマーチ夫人は次のように言う。

「(中略)わたしの経験では、質素な小さい家で、毎日の糧を働き得てゆく、多少不足勝ちの生活の方が、わずかな楽しみを多く味わうことができると思うのです。私はメグがつつましく家庭生活を始めるのを見て満足します。もしおかあさんの目に誤りがなければ、メグは夫の愛を我がものとする点では、この上もなく恵まれていると思います。それは財産を得る以上に幸福なことです。」

こうして二人は結婚していく。そのメグの結婚生活とエイミーとジョーの結婚について描かれるのが『続若草物語』である。次の章では、これらの事柄を中心にしてすすめていきたいと思う。

第三章 『続若草物語』について

第一節 メグの結婚生活

物語は、あれから三年経ち、メグの結婚仕度を始めるところからスタートする。メグは自分の新しい生活を質素な状態で始めなくてはならないということにはいささか失望を感じていた。メグの友人のサリイは、このあいだ金持ちの男と結婚した。メグは彼らのりっぱな馬車やたくさんの贈り物や豪華な仕度を自分のと比べてみない

わけにはいかなかった。そしてひそかに自分も同じようなものがほしいと願わないではいられなかったのである。とはいえ羨望も不満も、自分を待っている小さな家にジョンが注ぎこんでくれた幸福、よい愛情と苦勞のことを思うとき、あとかたもなく消えていった。

しかしメグは、結婚してからもぜいたくをしたいという欲望をかき捨すことができず、ジョンの収入が少ないにもかかわらず、自分の衣装代に莫大な金を使ってしまふ。そのことでメグは夫の貧乏であることを責め、彼を傷つけてしまふ。しかしジョンはそのことでメグをしからず、彼女のために自分を犠牲にするようになる。メグは大いに反省し、貧乏なるがゆえによけいに夫を愛するようになってきた。というのはそのおかげで彼は男を上げたように見えたからである。それは彼に自分の道をたたかいとる力と勇氣を与え、彼の愛するものの自然な欲望をむりもないことと思ひ、その失敗を慰めるだけのやさしい忍耐をもつように教えてくれたのであった。メグはもう無駄使いをしなくなつた。そしてメグはその事件を通し、母が彼女に悟してくれたように、ぜいたくを極めるよりも、貧しいなかで、夫妻が互いに助け合つていくなかで、ささやかな楽しみを味わつていくことの幸福であることを知るのであった。

第二節 エイミーの結婚

エイミーは「りっぱな社会」に出たいという望みをもつており、しかもその「りっぱな」というのがどんなことなのか、ほんとうの意味も知らないでいることであつた。富とか地位とか流行の芸ごとのようなものが、彼女にとっては最も望ましいものであつたのであり、そういうものをもち合せている人たちと交際するのが大好き

であつた。

そのうちエイミーはキャロル伯母に気に入られ、外国旅行のお供につれていってもらえることになる。その旅先で、エイミーは、ローリーの友人のフレッドに会う。フレッドは感じのよい青年で、彼はしだいにエイミーを好きになつていった。エイミーはそれほど彼に夢中ではないが、フレッドはたいへん金持ちであるので、彼が申し込んだら承知しようと決心する。しかしその後、フレッドは急いで帰国しなければなくなり、二人の間はそれ以上の進展はなかつた。

一方その頃ローリーはジョーを愛し、彼女に申し込むが、彼女は彼との關係は友情以上のものにはなれないと言つてそれを断る。その後彼は、失恋の痛手をいやすために、ヨーロッパを旅行する。その旅先でローリーは、エイミーと再会する。久しぶりに再会した二人は、もう小さなエイミーと、兄のローリーではなくなつていた。二人は、成人した男と女という新しい印象を与へあつていた。

そのうちにエイミーは、ローリーが無氣力に怠けている様子を見て説教をする。そしてエイミーはその無氣力が、ジョーに失恋した為だということを知つた時、男らしくそれに耐え、たとえジョーに愛されなくとも、尊敬されるようになるように説く。ローリーは彼女にさとされ、目がさめたような氣になり、まじめに生活するようになり祖父の元へもどる。その後彼は失恋の傷はすみやかにいやすれ、ジョーに対しては兄妹のような愛情だけが残つた。

その頃エイミーの方では、フレッドが帰つてきて彼女に答を要求した。しかし彼女は、きつぱりと「ノー」と答えたのである。彼女は、彼女の心をやさしい希望と不安でいっぱいにして新しいあ

こがれを満たすには、お金や地位以上のあるものが要だということに気づいたのであった。彼女はローリーに無情な、世俗的な女と思われたくなかった。今では愛らしい婦人になりたいところさえ、社交界の女王などにはそうなりたいと思わなくなった。

そうこうしているうちに、家では不幸が襲っていた。ペスが亡くなったのである。エイミーはその知らせを、ヴヴェで受けとり、ローリーはドイツで知った。ローリーは、彼女を慰めるためにただちにヴヴェに向かった。そして、ヴヴェで二人は再会する。その瞬間に、エイミーはこんなにまで自分を慰め、ささえてくれるものはローリーの他にはないことを感じ、ローリーの方でもまた、ジョーの代わりとなって自分を幸福にしてくれることのできる女性は世界中にエイミーただひとりだときめてしまったのである。

こうしてエイミーとローリーは結婚する。二人は、自分たちが金持ちだからといって、自分たちの幸福のみを追い求めるのではなく、他の人々にもそれを分けて幸せにしてあげようと決めるのであった。

最初エイミーは、結婚によって世俗的な富を得ることを望んでいたが、結果的にはそれよりもすぐれた愛情と信頼と幸福という富をかちえたのであった。

第三節 ジョーの結婚

ジョーはこの年になっても、愛とか恋とかいうものは大きらいで、決して受けつけようとはしなかった。そしてローリーが、自分に対して、ちょっとでもそのような気配をみせると、たちまち冗談にまぎらわしたり、眉をひそめたりするのであった。ジョーはロー

リーのことは好きであったが、それは友情以外のなものでもなかった。それに二人とも似すぎて、自由をほしがりすぎる性質であった。夫妻という関係でしあわせに暮らしていくには適していないとジョーは思ったからである。ジョーはローリーとのことが深入りしないうちに遠くへ行こうと決心し、ニューヨークのカーク夫人の所へ行くことにする。そこで彼女は、ベア先生という素晴らしい人物と出会うことになる。先生は、貧乏で、若くもなく、いわば変人であった。しかし、みんなに好かれ、人々は火のまわりに集まるように先生のまわりが集まってくる。それは、先生が持っている少年のように幸福な心と、悲しいことがあっても人には明るい半面をみせる仁愛の心だとジョーは知る。そして、毎日勉強を教わったり先生の親切な様子を見ていくうちに、ますます先生を尊敬するようになったのである。

その後ジョーは、再びわが家にもどり、ローリーから告白される。しかし彼女は、二人の関係は結婚するのに適していないので、結婚しても不幸になるだけであると、きっぱりと彼の申し込みを断わる。その為に、彼は傷心旅行に旅立っていく。

そんななかで、病弱だったペスが、ひどく弱り、ジョーの献身的な看護にもかかわらず亡くなってしまふ。ジョーは愛する妹を失なつた悲しみにうちひしがれていた。彼女は、口ぐせにどんな困難なことだろうとなにかすばらしいことをしたいと言っていた。そして今こそその望みがかなえられたのである。メグとエイミーが結婚し、ペスを失くした今、自分の生涯を父と母とにささげて、彼らが自分にくれたように、彼らのために家を楽しくする。これ以上美しい仕事があるであろうか。しかしそのために、野心満々たる少

女が、自らの希望、計画、欲求を思いあきらめて、生きるというほどつらいことはなかった。そして重荷はますますつらくなり、彼女は絶望のようなものにおそわれるのであった。

そんなある日、ジョーはメグと話しているうちに、メグが結婚し、メグがめつつきり進歩し、どんなにしあわせかを知り、メグにこんなことを言う。

「結婚というものは結局とてもすばらしいものなのね。やってみたとしても、お姉さまの半分も成功するかどうか疑わしいものだし。それにしてもできると仮定してのことだけれど。」

それに対してメグは、

「そこがあなたのやさしい、女らしい半面をみせる必要があるところなのよ、ジョー。あなたは栗のいがみたいなの、外には刺があるけど、中はすべすべしていて、むくことさえできればおいしい実がはいっているの。いつか恋をすればあなたの心が表にあらわれてよ。そうすればちくちくしたいがはとれてしまいわ。」

と答えている。ジョーは他の姉妹たちの幸福な姿をみるにつれて、彼女は寂しくなり、家族の愛情だけでなく、他人からも愛されたいという自然な欲求が起こってくるのであった。そして、ニューヨークで一緒に楽しい時をすごしたベア先生のことを思い出されるのであった。

そんなある日、ベア先生は突然マーチ家を訪問する。先生は、仕事の関係上しばらく町にたいざいし、その間にジョーと恋におち二人は将来を約束する関係になる。二人が互いの気持ちを理解するまでには時間がかかった。ジョーは恋をするにさえお行儀よくはできなかった。でもできるだけ感情を抑えようと努力した。そして失敗

してはあせり気味の日々を送った。そのたびにベア先生を一喜一憂させて大いに困らせた。

そんなうちに、マーチ伯母が突然なくなったのである。金持ちであった伯母は、ジョーに、プラムフィールド(季の園)の屋敷を残してくれたのである。ジョーは彼女の愛する夫とともに、そこで学校を開き、貧乏な子や、母のいない子を集めて、世話をして楽しい生活をさせてやろうというプランを立てる。二人とも、子供が大好きで、素晴らしい教育者であったので、どんな子供たちも、彼らにかかつてはまじめな良い子に育っていくのであった。

結局、ジョーは最初、結婚というものは、女が男にしばらくは、何も自由にできないものだときめて、恋愛をわずらわしく思っていた。そして一生、自分の好きなように、自由気ままに生きていこうとするのだが、ベスの死によってベスにそそいでいた愛情の行場を失い、両親の為に尽そうと試みる。しかし、大人になった彼女の愛情は、家族にそそがれるだけでは満たされなくなり、やがて他人に自分の愛情をささげ、自分も人から愛されたいという強い欲求がおこり、寂しさを感じるようになる。そして、ベア先生と結婚する。結婚してからのジョーは、子供たちの為に献身的に働く。その仕事は骨の折れるものであったが、ここではジョーは全く幸福な女性であった。彼女は自分の自由を求めることが幸福だった少女から、尊敬する夫と愛しあって、協力しあいながら、人の為に尽していくことに幸福を感じる女性へと、結婚という過程を通して成長していったのである。

第四章 三人姉妹の結婚観と作品の評価

第一節 作品に現われた姉妹たちの結婚観をめぐって

今まで研究してきた三人の姉妹の結婚を通して、共通しているのは、三人とも家庭の素晴らしさを知ったことであると思う。

先にも述べたように、彼女たちはみなそれぞれに夢をもっていた。メグはぜいたくな暮らし、エイミーは社交界の女王になると、ジョーは偉大な小説家になることであつた。

しかし、結局三人とも全く違う人生を歩むことになる。どうしてこのような結果になったのか？それは彼女たちが、自分の夢を実現できなかった意志の弱い女性だったからではない。私は彼女たちがごく自然な欲求のもとにそうしたのだと思う。その欲求とは、人を愛し、また自分も人に愛され、その人のために何かしたいというものである。それは女性の資質、天性ともいふべきものであると思う。その資質は、家庭においては主婦として、夫と子供を愛し、彼らに仕え家事を行なっていく。といつても、決して女性が男性に縛られ奴隷のように一生を送るということではない。それは愛する者に対しての、女性特有の愛情表現の形なのである。これに対して男性は、夫として愛する妻子のために働き、家計を支えるという役目をする。この二つの働きがなければ、家族というものは存在しな

い。

人間は一人で生きていくには困難である。しかし人間は家庭という共同体において、互いに愛し、協力しあつて、人生における幾多の苦難をのりこえ、希望をもって価値創造し、尊い人生を生きることが出来る。そして、男性も女性も家族というなかで、自らの

仕事をなすことに、幸せと生きがいを感じるのである。その生涯を共にする男女が、夫妻となつて家庭を出発させていく過程が結婚なのである。西洋に於てのそれは神の前で、共に愛情と忍耐をもって人生を生きていく誓いをたてる儀式なのである。家庭における愛は、自分だけの幸福を求める利己愛と比べるかに尊いものである。妹たちも最終的にはそのことに気づいて、真の幸福な生涯を送るのである。

『続若草物語』の最後では、ベスを除いて三人の姉妹が結婚し、それぞれの家族が集まつて母の六十歳の誕生日を祝うところで、

「世の中で家庭ほど美しいものはない」

とジョーが、姉妹たちの家族をながめながらしみじみと言う。愛の絆でしっかりと結ばれた家庭こそオールコットの理想であつた。そのことについて述べた文献があるので次に紹介してみようと思う。

美しい家庭像を画けば画くほど、オールコットの心の中には、家庭の崩壊の危機に面した十一歳の頃の思い出が忘れられないしこりとなつていたと思われる。それは一八四三年六月一日から十二月末までフルートランツ (Fruitlands) ですごしたときのことである。

この実験農場・ユートピアは父ブロンソンがあまりにも理想に走りすぎたために七カ月で失敗に終わったのであるが、このときの体験を素材として、三十年後の一八七三年に、『途方もない夢の試み』(“Transcendental Wild Oats—A Chapter from an Unwritten Romance”)と題して小品を発表している。これには狂気ともいえるようなブロンソンの夢物語りの実験をオールコットはユーモアをもって軽やかに描いている。社会の一単位である家庭を大きな意味

でとらえて、魂の浄化を目的として参加者が家族のように一つ屋根

の下で生活するというユートピアであった。従って、大きな共同社会への家族愛のためには、世俗的な小さな家族への愛を捨てなければいけない、妻子とも別れて、キリストにまねて精神的な永遠の愛の世界に生きようとブロンソンは決心したのである。幼い少女が、父と母の結びつきに、そして親子の輪の歪みを見出したことは大きな衝撃であったに違いない。十二月十日の日記に、

「夜になってお父様、お母様とアンナは長いこと話しあった。とても悲しくて皆が泣いた。ベッドに入ってから私もアンナと私は泣いてしまい、みんな一緒にいられるように神様にお祈りした。」とある。ブロンソンのこの計画は実行されなかったが、父親不在の、母親を中心とする理想の家庭像の源流は、フルートランツでの悲しい体験にさかのぼることができる。何時壊れるかも測りしれない愛の結びつきも、母と子の場合は絶対のものであるとオールコットは確信していたのであろう。

南北戦争のために父親不在の家庭もあれば、戦争後に発達してきた資本主義の激しい動きに、家庭をはなれることの多い父親は、家庭内における存在感をいよいよ弱めることになった。子供たちを教育し家庭を運営するのは母親の役目となる。こうした一八七〇年代に出現した母親主体の家族のサンプルが、『若草物語』に見られるのである。

注② 『アメリカ女流作家群像』 福田陸太郎編著 駁々堂
昭五十五・九・二十

第二節 オールコットのアメリカ文学に占める位置

オールコットの生きた一八三〇年代から六十年代にかけてニュー

イングランドを中心にアメリカ文学は最盛期を迎える。

有力な出版社（例えば、Harper, 一八二七、Appleton, 一八二六など）の設立、および開拓者精神とヨーロッパ浪漫主義の影響によって、アメリカ文学の独立が叫ばれ、ニューイングランドに浪漫主義文学の花が咲いた。ニューイングランドの浪漫主義は、おもにフランス人道主義の影響によって、倫理、道徳に強い関心を持った。しかし、これよりも直接的に強い影響を知識人たちに与えたものは、一種の浪漫的宗教ユニテリアニズムであった。これは主として、初期のユニテリアンでニューイングランド宗教界の実力者であるW・E・チャニングのたゆみない努力によって、一八二〇年頃から一部の知識人の間に力を持ったものである。しかしこの派の牧師は、各人の良心に従って説教をしたので、信仰面で不徹底になり、約十年で衰退した。このユニテリアニズムを母体にして、ドイツ哲学をはじめ東洋思想に至るまでも摂取した超絶主義思想（Transcendentalism）が生まれたのである。これは、精神を宇宙の中心的存在と信じ、自然を神意の反映だと考えた一種の神秘思想で、宗教としては楽天的、寛容、伝統無視というような特色を持ち、日常生活では、悪を否定し、個人主義を唱えた。宗教と言うよりも一種の理想主義運動であり、日常生活を目的視するところから、生活改善運動と言うこともできる。エマソンと、ソーローが特に有名であるが、超絶主義作家としては、この二人のほか、独学の読書人A・B・オールコットがいる。オールコットは、ノースカロライナでクエーカー教徒から「内なる光」と呼ばれる良心の声の導きを教えられ、帰郷すると超絶主義クラブに参加した。彼はボストンに学校を開設したり、菜食主義の共同生活団体「フルートランツ」を計

画したりしたが、考え方も行動も極端なために、なにをしても長続きがしなかった。

彼の娘であるルイザ・メイ・オールコットは、晩年に、哲学者の定義は何かとの問に答えて「哲学者とは空高く気球に乗っている男、そして家族や友達は彼を地面に引き下ろそうとして綱をにぎっている」と娘の立場を述べている。彼女は父のために綱を一生涯ひっぱりつづけた。夢見る父親の思想についてはオールコットは冷静であった。

美しい家庭と、その中心にあるべき女性の向上をうたったオールコットの作品が、南北戦争後の「金びか時代」にあつて清新な気風を読者の心に呼びおこしたことは『若草物語』や『少年たち』がベストセラーになった事でも窺える。現実の自分の家庭を素材に、虚飾のない文章で書かれた作品は、若い読者にとつて新しいタイプの読物であつたに違いない。児童文学といへばナサニエル・ホーソン(Nathaniel Hawthorn)の『ペーリーの万国史』(Peter Parley's *Universal History*, 1836) や『ワンダーブック』(A *Wonder Book for Boys and Girls*, 1851) が思い起されるが、いわゆるお伽話でない児童文学の登場に、オールコットの文学が力となつていたことは意味あることである。彼女の作品には人間の精神の美しさがうたい上げられているが、このロマンティックな面は超絶論者ブロンスンの娘として、父から受けついで信念である。なお、オールコットの描いたこのような文学作品は、大衆的なものであり、パール・バック(Pearl Back)などと共に、General Literature (一般文学)の系譜に属するものである。コンコードにあつて、エマソン、ソーロー、ホーソンと共にニューイングランドの精神に生きたルイザ・

メイ・オールコットは、児童文学の作家としてだけでなく、「新しい女」としても興味深い人物なのである。

おわりに

私は、この卒業論文を通して『若草物語』は本当にすばらしい作品であると改めて感じた。研究をすすめるにしたがつて、数多くの教訓を学び、結婚つてすばらしいものなんだなと思つた。これから、オールコットへの理解を深め、他の作品も読了していきたいと思う。

最後に、いろいろな資料をみせて下さり、多くの御指導をしてくださった寺田芳徳先生に、この場をかりてお礼を申しあげます。本当にありがとうございます。

参考文献

- 『若草物語』L・M・オールコット著 松本恵子訳 新潮社 昭61
- 『続若草物』L・M・オールコット著 吉田勝江訳 角川書店 昭27
- 『アメリカ女流作家群像』 福田陸太郎編著 駁々堂 昭55
- 『アメリカ文学史要説』 山川瑞明・広岡 実・中川法成 共著 南雲堂 昭58
- 『アメリカ文学名作選—風土と文学—』 福田陸太郎編著 中教出版
- アメリカ文学研究双書① 尾川敏彦編 山口書店 昭57
- 『アメリカ文学の自己発見』

Engene Ehrlich and Gorton Carruth :
The Oxford Illustrated Literary Guide to the United States,
Oxford University, 1982

基本文献

Louisa May Alcott: *Little Women*, Puffin Books, 1868~9

〔評〕

作者・作品の研究により、人間の愛と行動、特に結婚・家庭・幸福を考える上で、多くの収穫があったことを共に喜びたい。女性の生き方を考え、また物語の筋(プロット)をまとめる仕方には、なお多くの工夫が必要である。人間と結婚観を深く理解するためには、文学作品の根底に見られる『聖書』の教えを味読し、それに触れることが不可欠と思う。一九八〇年の夏、エマソン・ソロー、そしてオールコットの眠るボストン郊外コンコードの墓苑を訪ねた思い出を、小生は今改めてなつかしく思いかえしている。これからもいっそう研究と文学への道が、わたしたちの内に生きつづくように望みたい。

一九八九年三月

(寺田 芳徳)